障害のある幼児の保護者の学校教育への期待に関する調査研究（２）
－養護学校教員への質問紙調査をとおして－

岐阜大学教育学部障害児教育講座　坂　本　　裕
岐阜大学教育学部附属中学校　松　本　和　久
豊田市立豊田養護学校　山　本　亜矢子

Ⅰ．問題と目的

わが国の知的障害児教育においては，近年，知的障害養護学校や知的障害特殊学級に在籍する児童生徒数が増加傾向にある。この事由として，緒方明子（2002）は就学前の支援体制の充実を，小塩允護（2002）は知的障害養護学校や知的障害特殊学級の教育方法の充実を挙げ，それらが，保護者がわが子に「特別な教育の場」を選択することに影響し，知的障害養護学校や知的障害特殊学級への就学者が増加していると分析している。

このことに関して，坂本　裕・松本和久・小石麻利子（2003）は，障害のある幼児をもつ保護者を対象としたわが子の就学への意識に関する質問紙調査を行った結果として，特殊教育希望の保護者は「少人数学級・複数担任制でかつ個別の指導計画をもって柔軟に対応してほしい」といったことを学校教育に期待していること，更に養護学校希望の保護者は「複数担任制によってより専門性ある教育を，そして12年間一貫した教育や施設の充実，同じような障害のある子どもと出会えること」を学校教育に期待しているとしている。

そのような保護者の学校教育への期待について，細村迪夫（2002）は就学基準及び就学手続きの改正を踏まえ，市町村の教育委員会や就学指導委員会は保護者の意見（ニーズ）を十分把握し，その期待に応えるよう学校としての機能を果たしていくようにすべきであると指摘している。また，2003（平成15）年３月に示された「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」において，教育，福祉，医療，労働などが一体となって乳幼児期から学校卒業後まで障害のある子ども及びその保護者などに対する相談及び支援を行うために，養護学校などにおいては2005（平成17）年度までに，障害のある本人の意見や保護者などの意向を十分に反映させた「個別の（教育）支援計画」を策定することが求められている。

つまり，これからの特別支援教育は障害のある本人やその保護者などの学校教育への期待を十分把握した上で，養護学校などにおける就学支援や教育課程編成および教育実践を展開しなければならない状況にあると考えられる。

本研究においては，これまで述べてきたような状況を踏まえ，就学者を最初に担当する養護学校小学部の教員が保護者の養護学校教育への期待をどう捉え，教育課程編成を行おうとしているのかを明らかにするために質問紙調査を実施する。そして，その結果について，坂本　裕・松本和久・小石麻利子（2003）が行った保護者対象の調査結果との比較検討を行い，その現状と課題を明らかにしたい。

Ⅱ．方法

１．目的

養護学校の小学部を担当している教員は，障害のある子どもの保護者がその就学にあたって，養護学校にどのような期待をもっていると捉えているのかを明らかにすることを目的とした。また，障害のある子どもをもつ保護者の意識調査（坂本裕・松本和久・小石麻利子，2003）の結果と比較検討し，その一致点や相違点も明らかにする。

２．対象者

Ａ県立知的障害養護学校２校，Ａ県立病弱養護学校１校，Ａ県立肢体不自由養護学校１校，Ａ市立知的障害養護学校１校の計５校の小学部所属の教員138名を対象とした。

３．項目

坂本　裕・松本和久・小石麻利子（2003）が障害のある幼児の保護者に行った就学に際しての意識調査と同様のTable１に示したような31項目を設定した。なお,各教員の特殊教育免許状の有無,特殊教育勤務歴に関する項目も設定した。

4. 方法

各養護学校に出向き，学校長を通して小学部を担当している138名の各教員に調査の依頼を行い,127通回収をした。回収率は92%であった。その後,項目ごとに集計を行い，その結果を篠原弘章（1989）が開発したプログラム「ｒ×ｃ表のχ^2検定と尤度比検定（CHI２RC）」を用いて分析した。

5. 期間

2003年３月～９月

III．結果と考察

１．教員と保護者の意識の差異について

今回養護学校教員に行った質問紙調査の結果と坂本　裕・松本和久・小石麻利子（2003）が保護者に行った質問紙調査の結果について尤度比検定を行った結果はTable１に示したが,「12年間の一貫した教育」と「学校の滞在時間」に５%水準の有意差が認められた。つまり，保護者は養護学校教育に「12年間の一貫した教育」を期待し,「学校に長い時間滞在すること」には期待していないが,教員はそのように捉えていなかったことになる。

「12年間の一貫した教育」について有意差が認められたことは，保護者が障害のあるわが子に途切れのない教育を強く望んでいることの表れと考えることができよう。それに対し，教員は義務制の小・中学部と非義務制高等部では定期異動が異なったり，学校内での学部間の移動ができないこと，日々の教育活動の多くが学部ごとに実施されている教員集団の状況などが影響してか,「12年間

Table１　養護学校小学部教員による「保護者の期待」の捉えと保護者の「養護学校への期待」の相異について

		養護学校小学部教員（127人）		養護学校希望の保護者（13人）		レンジ	尤度比
		Yes（%）	No（%）	YES（%）	No（%）	（%）	（df＝１）
1	教師の愛情豊さ	62(48.82)	65(51.18)	4(30.8)	9(69.2)	18.02	1.587
2	専門性	107(84.25)	20(15.75)	11(84.6)	2(15.4)	0.35	0.001
3	個別の指導	84(66.14)	43(33.86)	7(53.8)	6(46.2)	12.34	0.757
4	少人数教育	72(56.69)	55(43.31)	9(69.2)	4(30.8)	12.51	0.784
5	障害についての詳しい情報	61(48.03)	66(51.97)	9(69.2)	4(30.8)	21.17	2.170
6	学習についての説明	20(15.75)	107(84.25)	1(7.7)	12(92.3)	8.05	0.699
7	毎年の一貫した指導	29(22.83)	98(77.17)	4(30.8)	9(69.2)	7.97	0.390
8	専門機関との連携	49(38.58)	78(61.42)	3(23.1)	10(76.9)	15.48	1.295
9	教職員の連携	26(20.47)	101(79.53)	4(30.8)	9(69.2)	10.33	0.686
10	学校での様子の連絡	48(37.80)	79(62.20)	4(30.8)	9(69.2)	7.00	0.255
11	柔軟な対応	91(71.65)	36(28.35)	7(53.8)	6(46.2)	17.85	1.663
12	学校の活動内容の把握	15(11.81)	112(88.19)	1(7.7)	12(92.3)	4.11	0.218
13	複数担任制	83(65.35)	44(34.65)	8(61.5)	5(38.5)	3.85	0.075
14	12年間の一貫教育	31(24.41)	96(75.59)	7(53.8)	6(46.2)	29.39	4.603*
15	子ども同士の関わり	16(12.60)	111(87.40)	3(23.1)	10(76.9)	10.50	0.960
16	周囲の子からの刺激	15(11.81)	112(88.19)	3(23.1)	10(76.9)	11.29	1.142
17	放課後・休日の遊び相手	7(5.51)	120(94.49)	0(0.0)	13(100.0)	5.51	1.402
18	障害のある子との出会い	63(49.61)	64(50.39)	10(76.9)	3(23.1)	27.29	3.727
19	自力通学	2(1.57)	125(98.43)	0(0.0)	13(100.0)	1.57	0.393
20	スクールバス	69(54.33)	58(45.67)	6(46.2)	7(53.8)	8.13	0.316
21	いじめ	27(21.26)	100(78.74)	5(38.5)	8(61.5)	17.24	1.775
22	学校の滞在時間	19(14.96)	108(85.04)	0(0.0)	13(100.0)	14.96	3.995*
23	多様な人との出会い	26(20.47)	101(79.53)	6(46.2)	7(53.8)	25.73	3.819
24	施設の充実	35(27.56)	92(72.44)	5(38.5)	8(61.5)	10.94	0.652
25	担任への相談のしやすさ	38(29.92)	89(70.08)	7(53.8)	6(46.2)	23.88	2.889
26	親相互の連携	51(40.16)	76(59.84)	4(30.8)	9(69.2)	9.36	0.448
27	親向け勉強会	18(14.17)	109(85.83)	2(15.4)	11(84.6)	1.23	0.014
28	地域での活動	4(3.15)	123(96.85)	0(0.0)	13(100.0)	3.15	0.792
29	放課後・休日の遊び場	3(2.36)	124(97.64)	0(0.0)	13(100.0)	2.36	0.591
30	地域での活動情報	6(4.72)	121(95.28)	1(7.7)	12(92.3)	2.98	0.192

*＜.05

の一貫教育」を保護者が期待していると捉えることが少なかったように思われる。しかし，保護者が期待するような「12年間の一貫教育」の実施は当然のことであり,「重点施策実施５か年計画」や「今後の特別支援教育の在り方について（最終答申)」において示された「個別の（教育）支援計画」などを実行に移す中で，教員の意識も変化していくことを願いたい。

また,「学校の滞在時間」については，養護学校に長時間の学校滞在を期待している保護者は一人もいなかったために有意差が生じたものと思われる。実際のところ，校区が広範囲に及ぶなど学校への長時間滞在は養護学校では実現できない状況にあると思われる。ただし,近年ではレスパイト・システムのような保護者の心的ケアを図ろうとする動きもあり，そうした教員の意識が今回の回答に影響したのかもしれない。このことについては更なる検討が必要であろう。また，今回の調査の自由記述欄に「保護者の中には18時頃まで預かってもらいたいという人もいる」との記述もあったが，保護者の勤務状況などから少しでも長くわが子を預かってほしいという期待も保護者によってはあるものと思われる。小学校で，放課後，低学年の児童を対象として行われている学童保育においても，厚生労働省の施策により，2001（平成13）年度より障害のある児童の受け入れが促進され，障害のある児童の放課後の生活を支えようとする動きが全国で取り組まれるようになってきている。このような動向を踏まえると，自校での学童保育は実施しないまでも，子どもたちが生活する各地域においてどのようなレスパイト・サービスなどを受けることができるのかといったような情報提供を行えるようにしておくべきであろう。

２．教員の学校種による意識の差異について

今回の調査結果を学校種毎に分類し尤度比検定を行った結果はTable２に示したように,「専門機関との連携」で１％水準,「スクールバス」,「施設の充実」,「親向け勉強会」で５％水準の有意差が認められた。この有意差が認められた４つの項目につ

Table２　学校種の異なる教員による「保護者の期待」の捉えの相異について

		知的障害養護学校(80人)		肢体不自由養護学校(31人)		病弱養護学校（16人）		レンジ	尤度比
		YES（%）	NO（%）	YES（%）	NO（%）	YES（%）	NO（%）	(%)	(df＝１)
1	教師の愛情豊さ	39(48.75)	41(51.25)	14(45.16)	17(54.84)	9(56.25)	7(43.75)	11.09	0.521
2	専門性	67(83.75)	13(16.25)	28(90.32)	3(9.68)	12(75.00)	4(25.00)	15.32	1.895
3	個別の指導	50(62.50)	30(37.50)	21(67.74)	10(32.36)	13(81.25)	3(18.75)	18.75	2.305
4	少人数教育	49(61.25)	31(38.75)	16(51.61)	15(48.39)	7(43.75)	9(56.25)	17.50	0.302
5	障害についての詳しい情報	39(48.75)	41(51.25)	16(51.61)	15(48.39)	6(37.50)	10(62.50)	14.11	0.896
6	学習についての説明	9(11.25)	71(88.75)	7(22.58)	24(77.42)	4(25.00)	12(75.00)	13.75	3.223
7	毎年の一貫した指導	22(27.50)	58(72.50)	5(16.13)	26(83.87)	2(12.50)	14(87.50)	15.00	2.911
8	専門機関との連携	22(27.50)	58(72.50)	16(51.61)	15(48.39)	11(68.75)	5(31.25)	41.25	12.450**
9	教職員の連携	15(18.75)	65(81.25)	6(19.35)	25(80.65)	5(31.25)	11(68.75)	12.50	1.199
10	学校での様子の連絡	30(37.50)	50(62.50)	11(35.48)	20(64.52)	7(43.75)	9(56.25)	8.27	0.311
11	柔軟な対応	56(70.00)	24(30.00)	25(80.65)	6(19.35)	10(62.50)	6(37.50)	18.15	2.063
12	学校の活動内容の把握	6(7.50)	74(92.50)	5(16.13)	26(83.87)	4(25.00)	12(75.00)	17.5	4.230
13	複数担任制	58(72.50)	22(27.50)	18(58.06)	13(41.94)	7(43.75)	9(56.25)	28.75	5.685
14	12年間の一貫教育	23(28.75)	57(71.25)	4(12.90)	27(87.10)	4(25.00)	12(75.00)	15.85	3.341
15	子ども同士の関わり	8(10.00)	72(90.00)	4(12.90)	27(87.10)	4(25.00)	12(75.00)	15.00	2.335
16	周囲の子からの刺激	11(13.75)	69(86.25)	2(6.45)	29(93.55)	2(12.50)	14(87.50)	7.30	1.286
17	放課後・休日の遊び相手	5(6.25)	75(93.75)	0(0.00)	31(100.00)	2(12.50)	14(87.50)	12.50	4.719
18	障害のある子との出会い	38(47.50)	42(52.50)	19(61.29)	12(38.71)	6(37.50)	10(62.50)	23.79	2.797
19	自力通学	1(1.25)	79(98.75)	0(0.00)	31(100.00)	1(6.25)	15(93.75)	6.25	2.340
20	スクールバス	50(62.50)	30(37.50)	10(32.25)	21(67.74)	9(56.25)	7(43.75)	30.25	8.340*
21	いじめ	17(21.25)	63(78.75)	6(19.35)	25(80.65)	4(25.00)	12(75.00)	5.65	0.197
22	学校の滞在時間	14(17.50)	66(82.50)	3(9.68)	28(90.32)	2(12.50)	14(87.50)	7.82	1.230
23	多様な人との出会い	14(17.50)	66(82.50)	6(19.35)	25(80.65)	6(37.50)	10(62.50)	20.00	2.920
24	施設の充実	16(20.00)	64(80.00)	14(45.16)	17(54.84)	5(31.25)	11(68.75)	25.16	6.917*
25	担任への相談のしやすさ	24(30.00)	56(70.00)	7(12.90)	24(77.42)	7(43.75)	9(56.25)	30.85	2.203
26	親相互の連携	29(36.25)	51(63.75)	17(54.84)	14(45.16)	5(31.25)	11(68.75)	23.59	3.772
27	親向け勉強会	12(15.00)	68(85.00)	1(3.23)	30(96.77)	5(31.25)	11(68.75)	28.02	7.313*
28	地域での活動	3(3.75)	77(96.25)	1(3.23)	30(96.77)	0(0.00)	16(100.00)	3.75	1.114
29	放課後・休日の遊び場	1(1.25)	79(98.75)	1(3.23)	30(96.77)	1(6.25)	15(93.75)	5.00	1.334
30	地域での活動情報	4(5.00)	76(95.00)	0(0.00)	31(100.00)	2(12.50)	14(87.50)	12.50	4.522

**p＜.01, *p＜.05

いていずれの学校種間で有意差が生じたのかを特定するために２校間でさらに尤度比検定を行った。

その結果,「専門機関との連携」においては，病弱養護学校と知的障害養護学校との間で１％水準，肢体不自由養護学校と知的障害養護学校の間で５％水準の有意差が認められた。なお，肢体不自由養護学校と病弱養護学校の間には有意差が認められなかった。このことから，病弱養護学校と肢体不自由養護学校の教員は，知的障害養護学校の教員より,「専門機関との連携」を親が期待していると強く意識していることが明らかになった。病弱養護学校に通う児童生徒においては疾病のために医療機関との関係が深い状況にあることや，肢体不自由養護学校に通っている児童生徒の多くは機能を回復させるための訓練や手術を受けるために専門機関や医療機関と関わることが多いことなどが今回の結果に大きく影響しているように思われる。またさらに肢体不自由養護学校と病弱養護学校はそれぞれ通園施設や病院などに隣接しており，日常的に「専門機関との連携」を行わないと，学校運営が不可能な状況にあるため，そのような意識が働いたものとも考えることができよう。

また,「スクールバス」の項目は，知的障害養護学校と肢体不自由養護学校の間に１％水準の有意差が認められた。児童生徒の学校への通学手段を考えた際，知的障害養護学校は「スクールバス」が，肢体不自由養護学校は「保護者の自家用車による自宅からの送迎」,病弱養護学校は「病棟からの送迎」がその中心となっていることが多いようである。このような日々の状況での教員の意識が今回の調査にも影響したものと思われる。ただし，中村　瞭（1998）によるとスクールバスに医療的なケアに対処する介助員が乗車し緊急な対応ができるようにしている養護学校もあるとのことである。このようにスクールバスに子どもを乗せても安心できる体制が今後整うこととなれば，教員の「スクールバス」に対する期待は変化していくのかもしれない。

そして,「施設の充実」については肢体不自由養護学校と知的障害養護学校の間に１％水準の有意

Table３　特殊教育教員免許状所持状況による「保護者の期待」の捉えの相異について

		特殊教育免許状あり（87人）		特殊教育免許状なし（40人）		レンジ	尤度比
		YES（%）	NO（%）	YES（%）	NO（%）	（%）	（df＝１）
1	教師の愛情豊さ	40(45.98)	47(54.02)	22(55.00)	18(45.00)	9.02	0.894
2	専門性	77(88.51)	10(11.49)	30(75.00)	10(25.00)	13.51	3.552
3	個別の指導	55(63.22)	32(36.78)	29(72.50)	11(27.50)	9.28	1.075
4	少人数教育	53(60.92)	34(39.08)	19(47.50)	21(52.50)	13.42	2.001
5	障害についての詳しい情報	42(48.28)	45(51.72)	19(47.50)	21(52.50)	0.78	0.007
6	学習についての説明	13(14.94)	74(85.06)	7(17.50)	33(82.50)	2.56	0.133
7	毎年の一貫した指導	17(19.54)	70(80.46)	12(30.00)	28(70.00)	10.46	1.648
8	専門機関との連携	33(37.93)	54(62.07)	16(40.00)	24(60.00)	2.07	0.049
9	教職員の連携	17(19.54)	70(80.46)	9(22.50)	31(77.50)	2.96	0.146
10	学校での様子の連絡	32(36.78)	55(63.22)	16(40.00)	24(60.00)	3.22	0.120
11	柔軟な対応	57(65.52)	30(34.48)	34(85.00)	6(15.00)	19.48	5.529*
12	学校の活動内容の把握	9(10.34)	78(89.66)	6(15.00)	34(85.00)	4.66	0.550
13	複数担任制	54(62.07)	33(37.93)	29(72.50)	11(27.50)	10.43	1.346
14	12年間の一貫教育	19(21.84)	68(78.16)	12(30.00)	28(70.00)	8.16	0.966
15	子ども同士の関わり	12(13.79)	75(86.21)	4(10.00)	36(90.00)	3.79	0.371
16	周囲の子からの刺激	10(11.49)	77(88.51)	5(12.50)	35(87.50)	1.01	0.026
17	放課後・休日の遊び相手	3(3.45)	84(96.55)	4(10.00)	36(90.00)	6.55	2.077
18	障害のある子との出会い	43(49.43)	44(50.57)	20(50.00)	20(50.00)	0.57	0.004
19	自力通学	1(1.15)	86(98.85)	1(2.50)	39(97.50)	1.35	0.300
20	スクールバス	51(58.62)	36(41.38)	18(45.00)	22(55.00)	13.62	2.046
21	いじめ	21(24.14)	66(75.86)	6(15.00)	34(85.00)	9.14	1.434
22	学校の滞在時間	11(12.64)	76(87.36)	8(20.00)	32(80.00)	7.36	1.119
23	多様な人との出会い	18(20.69)	69(79.31)	8(20.00)	32(80.00)	0.69	0.008
24	施設の充実	23(26.44)	64(26.44)	12(30.00)	28(70.00)	3.56	0.173
25	担任への相談のしやすさ	23(26.44)	64(26.44)	15(37.50)	25(62.50)	11.06	1.566
26	親相互の連携	37(42.53)	50(57.47)	14(35.00)	26(65.00)	7.53	0.652
27	親向け勉強会	15(17.24)	72(82.76)	3(7.50)	37(92.50)	9.74	2.359
28	地域での活動	3(3.45)	84(96.55)	1(2.50)	39(97.50)	0.95	0.084
29	放課後・休日の遊び場	2(2.30)	85(97.70)	1(2.50)	39(97.50)	0.20	0.005
30	地域での活動情報	3(3.45)	84(96.55)	3(7.50)	37(92.50)	4.05	0.931

*＜.05

差が認められた。このことについても，肢体不自由養護学校は脳性まひなど四肢にまひがあり，車椅子などの補助具を利用する児童生徒が多数在籍しているため，今回の調査においても施設整備に対する教員の意識が働いたものと思われる。

さらに,「親向けの勉強会」については，病弱養護学校と肢体不自由養護学校との間に１％水準の有意差が認められた。これは病弱養護学校に通う児童生徒の中には進行性の病気を抱えている子どもや常に医療的なケアを必要としている子どももおり，学習を行うためにはまず生活そのものを考えていく必要があるためだと思われる。このように児童生徒の生活そのものを考えていくためにも保護者との間に配慮に関しての共通理解をする必要があり,「親向けの勉強会」を行う必要があると教員が捉えているのではないだろうかと考えられる。また調査対象校においては教員向けに講師を招いての講演会や医療器具を取り扱うための学習会などが行われており, 保護者に対してもこのような機会が必要であると考えているように思われる。

３．教員の特殊教育教員免許状保持による意識の差異について

今回の調査結果を特殊教育免許状所持状況で分類し尤度比検定を行った結果はTable３に示したようになったが，特殊教育教員免許状所持の教員と特殊教育教員免許状未所持の教員の回答において有意差が認められた項目は「柔軟な対応」のみであり，５％水準で特殊教育免許状未所持の教員の方が意識として高かった。この理由としては特殊教育教員免許状未所持の教員にとっては通常の学級での教育と比較すると養護学校での教育は柔軟に対応されていることを特別の方策と捉え，保護者もそのことを重視していると推測しているのではないかと思われる。

４．教員の特殊教育勤務歴による意識の差異について

今回の調査結果を特殊教育勤務歴状況で分類し尤度比検定を行った結果をTable４に示した。結果として特殊教育勤務歴５年未満の教員と特殊教育

Table４　特殊教育勤務歴状況による「保護者の期待」の捉えの相異について

		特殊教育歴５年未満（44人）		特殊教育歴５年以上（83人）		レンジ	尤度比
		Yes（%）	No（%）	Yes（%）	No（%）	（%）	（df＝１）
1	教師の愛情豊さ	25(56.82)	19(43.18)	37(44.58)	46(55.42)	12.24	1.728
2	専門性	35(79.56)	9(20.45)	72(86.75)	11(13.25)	7.19	1.091
3	個別の指導	31(70.45)	13(29.55)	53(63.86)	30(36.14)	6.59	0.566
4	少人数教育	24(54.54)	20(45.45)	48(57.83)	35(42.17)	3.29	0.126
5	障害についての詳しい情報	26(59.09)	18(40.91)	35(42.17)	48(57.83)	16.92	3.310
6	学習についての説明	8(18.18)	36(81.82)	12(14.46)	71(85.54)	3.72	0.295
7	毎年の一貫した指導	9(20.45)	35(79.55)	20(24.10)	63(75.90)	3.65	0.219
8	専門機関との連携	14(31.81)	30(68.18)	35(42.17)	48(57.83)	10.36	1.317
9	教職員の連携	12(27.27)	32(72.73)	14(16.87)	69(83.13)	10.4	1.857
10	学校での様子の連絡	16(36.36)	28(63.64)	32(38.55)	51(61.45)	2.19	0.059
11	柔軟な対応	32(72.72)	12(27.27)	59(71.08)	24(28.92)	1.64	0.038
12	学校の活動内容の把握	10(22.73)	34(77.27)	5(6.02)	78(93.98)	16.71	7.287**
13	複数担任制	30(68.18)	14(31.82)	53(63.86)	30(36.14)	4.32	0.239
14	12年間の一貫教育	12(27.27)	32(72.73)	19(22.89)	64(77.11)	4.38	0.296
15	子ども同士の関わり	8(18.18)	36(81.82)	8(9.64)	75(90.36)	8.54	1.827
16	周囲の子からの刺激	7(15.91)	37(84.09)	8(9.64)	75(90.36)	6.27	1.047
17	放課後・休日の遊び相手	5(11.36)	39(88.64)	2(2.41)	81(97.59)	8.95	4.172*
18	障害のある子との出会い	20(45.45)	24(54.55)	43(51.81)	40(48.19)	6.36	0.465
19	自力通学	0(0.00)	44(100.00)	2(2.41)	81(97.59)	2.41	1.718
20	スクールバス	25(56.82)	19(43.18)	44(53.01)	39(46.99)	3.81	0.168
21	いじめ	11(25.00)	33(75.00)	16(19.28)	67(80.72)	5.72	0.553
22	学校の滞在時間	7(15.91)	37(84.09)	12(14.46)	71(85.54)	1.45	0.047
23	多様な人との出会い	17(38.64)	27(61.36)	9(10.84)	74(89.16)	27.80	13.068**
24	施設の充実	15(34.09)	29(65.91)	20(24.10)	63(75.90)	9.99	1.413
25	担任への相談のしやすさ	14(31.82)	30(68.18)	24(28.92)	59(71.08)	2.90	0.115
26	親相互の連携	18(40.91)	26(59.09)	33(39.76)	50(60.24)	1.15	0.016
27	親向け勉強会	7(15.91)	37(84.09)	11(13.25)	72(86.75)	2.66	0.164
28	地域での活動	2(4.55)	42(95.45)	2(2.41)	81(97.59)	2.14	0.410
29	放課後・休日の遊び場	1(2.27)	43(97.72)	2(2.41)	81(97.59)	0.14	0.002
30	地域での活動情報	2(4.55)	42(95.45)	4(4.82)	79(95.18)	0.27	0.005

**＜.01, *＜.05

勤務歴５年以上の教員においては,「学校の活動内容の把握」と「多様な人との出会い」で１％水準,「放課後・休日の遊び相手」において５％水準の有意差が認められた。この３つの項目は個別の指導計画，交流教育，地域での活動と近年特に課題とされているものである。いずれの項目においても特殊教育勤務歴５年未満の教員の方が高い数値を示した。これは特殊教育に携わっている期間が短いためにできるだけ早く特殊教育に対しての知識を深めようと様々な情報を集め，それらの情報に対して敏感に反応したためではないかと推測される。ただし自由記述などから特殊教育勤務歴５年未満の教員の方が新しい教育課題に対する意識が高い明確な理由までは確かめることができなかった。特殊教育勤務歴５年未満の教員の方がなぜ意識が高かったのかについては，研修を受ける頻度なども含めて今後更なる検討が必要と考える。

Ⅳ．まとめ

今回の質問紙調査を行った結果，養護学校教育に対する「複数担任制で少人数教育を行い，専門性ある教育を行ってほしい」といった障害幼児をもつ保護者の期待と，養護学校小学部担当教員の「保護者の養護学校教育への期待」の捉えの間に大きな意識の差は認められなかった。このことから，養護学校小学部担当の教員は保護者の期待をほぼ捉えているということができるであろう。ただし，保護者と教員との間に意識の差が認められた「12年間の一貫した教育」については，保護者の期待の高さを教員が捉え，真摯に受け止めていってほしいと思う。

また，養護学校の種別による比較においては，保護者の期待が高いと捉えている項目の大部分に相違はなかったといえる。しかし，知的障害養護学校の「スクールバス」や，肢体不自由養護学校の「施設の充実」，病弱養護学校における「専門機関との連携」など，それぞれの養護学校の専門性や対応する児童生徒への配慮などの特徴から，保護者の期待に対する微妙な捉え方の差がみられた。このことは，各養護学校において各自の専門性を生かし，より望ましい教育活動を展開しようとする構えの表れとも考えられる。

これまで述べてきたような保護者が養護学校などに対して期待している事項の分析について，太田俊己（2004）は的確かつ早急な分析の必要性を指摘している。ただし,今回対象とした坂本　裕・松本和之・小石麻利子（2003）が行った質問紙調査では養護学校を希望している保護者は13名と少数であるため，データを増し再検討を行うことが今後の課題として残された。

付記

本論文の一部は第42回日本特殊教育学会年次大会において口頭発表した。

謝辞

質問紙調査実施においては各養護学校の先生方にお力添えをいただき，貴重な御意見を多々聞かせていただくことができました。皆様に心から御礼申し上げます。

文献

細村迪夫（2002）これからの就学指導の在り方について，特別支援教育，７，２－３．

中村　瞭（1998）大都市の養護学校でいま何が起こっているか（4）兵庫県尼崎市尼崎養護学校，養護学校の教育と展望，108，54－57.

内閣府（2002）重点施策実施５か年計画.

緒方明子（2002）就学基準の改正と就学相談，発達の遅れと教育，541，26－26.

太田俊己（2004）概況，日本知的障害福祉連盟（編）発達障害白書－2004年版－，日本文化科学社，58－59.

小塩允護（2002）就学基準の改正と知的障害教育，特別支援教育，７，16－19.

坂本　裕・松本和久・小石麻利子（2003）障害のある幼児の保護者の学校教育への期待に関する調査研究（1），岐阜大学教育学部研究報告（人文科学），52(1)，189－193.

篠原弘章（1989）ノンパラメトリック法，ナカニシヤ出版.

特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2003）今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）.